

東京歌会（第六十四回）

平成三十年二月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

路地裏の雪片残る角に立つ春告草のほころびはじむ

市川茂子

春告草。はるつげぐさ。ここで草といふところからは、スノードロップ（まつゆきそう、ゆきのはな）のようでもあるが、角に立つ、（蕾の）ほころびはじむ、などから梅のこととしれる。先々回の東京の降雪がまだ残っている。雪片せつぺんのコトバの選択はどうだろうか。雪塊ゆきくれもある。

青空に雪きらめきて山寺の岩の上なる社かなしも

布宮慈子

仙山線の山形県内の駅に、山寺、があり、その仙山線車内から見ている。山の雪が反射している。岩の上なる社、の小ささ。かなしも、である懐かしいものをみているのだ。

神楽鈴に似る黒き実を北風きたかぜにさらしさるすべりは花の季を思うや

林博子

丸い一センチほどの実だという。さるすべりは、およそ花を見ていて、実に気付くことは少

ない。神楽鈴に似る、というところが鮮やか。三句以降の主語はさるすべり。

チューリップの種類は多くタイムレス杏仁豆腐の香りすると

小野澤繁雄

チューリップは今の時期の花。タイムレスは一品種の名称。テレビでみたという。杏仁豆腐は、点心の一種。杏仁の風味づけには、アーモンドエッセンスを代用することが多い。香りはそこから。

東京歌会（第六十五回）

三月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

蒼穹の遠ざかりゆく心地せるわが視点とみに泳ぐか真秀まほら

林博子

視点がもってしまった戸惑い。深さの体験でもある。まほら（なる、に）、は俳句、短歌に、空との関連で使われている例がある。

音もなく降りてしみゆく春の雨地に棲むくさぐさ目覚めくるなり

市川茂子

上旬丁寧。地に棲むくさぐさ、も整理されたいかた。全体に視線の低いところがある。会
の日は啓蟄からおおよそ一週間後。

羽黒山に雪降り積もり婆なくて爺杉ひとり立つてゐるらむ

布宮慈子

婆杉は、明治三十五年（一九〇二）の暴風で倒れてしまったという。婆なくて爺ひとり、といっ
た気分がある。物語風の気分である。羽黒山であることもいい。

立春といつともふゆの柿の木は暗々と立つ萼をのこして

小野澤繁雄

立春の頃はまだ寒い。おおむね冬木のなかで、柿の木は、いかにも暗々と立っている。実に
残り付いているのは蒂へたともいう。

妹は桃色の花吾はこの石楠花しやくなげ捧ぐ父に代りて

中川禮子

桃色の花、は桃ではないようだ。作者は姉で、手に石楠花の花を持つ。墓参りだろうか。父
に代りて、から、母の墓参りと読んだ。姉妹二人の立姿が眼に浮かぶ。

東京歌会（第六十六回）

四月十九日（木）、会場：文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者四名（市川茂子、
小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

強風にあおられて散る桜樹の胴吹の花咲きいて残る

市川茂子

当初、胴吹、の読みにも意味にも戸惑ったが、園芸、盆栽用語らしい。幹や枝の途中に吹く
芽（花）のこと。強風にも残りやすいのだ。胴吹き、としたいという声もある。丁寧に見ている。

今生こんじょうの花とは未だ思わずも歳々色をふかくして桜

林 博子

今生、は、この世（に生きている間）の意（「新明解国語辞典」第五版）。ここでは、見納めの花といっ
たところか。未だ思わずも、と云っているが、（桜の花の）色をふかくしているのは思いなのだ。

新装なりし書店に先生の著書あり十余冊の並ぶ

丸山弘子

やや破調だが、歌には調子も気持ちも通っている。先生は、清紫会（エッセイの会）でお世話
になった（なっている）外山滋比古先生。歌会参加者には周知。書店への思いもある。

献木のイチイ二木の傍らにしだれ桜はいきおい終る

小野澤繁雄

二本でなく、二本（ふたき）。寺社の境内か。桜は早かったが、まだ八重の勢いは残っている。ここでは枝垂れ。結句、いきおい終る、はいかにも可哀想な終わり方、と。

ジャガイモの「インカのめざめ」は黄色くて南米おもふ朝の味噌汁

布宮慈子

味噌汁の具の話でもある。とろみがつく。インカのめざめ、は銘柄なのだろう。みない銘柄。気付かなくてもいいが、めざめ、と、朝の、が呼応している。

（報告…小野澤繁雄）

